

健康教育研究(Ⅲ)

—大学公開講座「くらしと健康」—

山本 万喜雄¹⁾

Health education study (Ⅲ)

—Open college “life and health” —

Makio Yamamoto¹

Key words : health education, open college

キーワード：健康教育，大学公開講座

はじめに

1999年11月11日は、愛媛大学開学50周年記念日である。大学はこの日を記念して、『愛媛大学五十年史』を刊行した。1,000頁を越えるこの本には、各学部の歴史が叙述されているが、教育学部の章のなかで「公開講座」の項が設けられており次のように記されている。

「大学の公開講座とは、一般に大学がその機能を在外者以外の学習に役立てるために開設する学習機会のことである。学校教育法は、大学教育機会の開放・拡大の見地から、「大学においては、公開講座の施設を設けることができる」(69条)とし、その法的根拠を設けている。これを承けて、戦後まもなくの時期に文部省の委嘱事業として各地で大学開放講座が設けられ、昭和39(1964)年、生涯学習推進の見地から、社会教育講座が『大学開放の促進について』を提言し、以後、開設講座数、受講者数は次第に増加しつつある。近年、自治体・他機関との共同事業という形態でも行なわれるなど、その実施形態も多様となり、また、地域の課題解決や活性化に直接寄与する内容が、ますますその充実が期待されている。(後略)」¹⁾

大学公開講座の組織と運営について論及している山本慶裕によれば、1996年現在、年間の受講者数は約77万人に及んでいるという。²⁾ また、公開講座の開設目

的をみると、「社会的サービス」、「大学のイメージアップ」、「教育研究の向上」、「学生募集の対策」の順になっている。

さて、向井康雄・山本万喜雄による「健康」に関する公開講座については、先の『五十年史』の中で次のように記されている。

「昭和51(1976)年より自主講座として開講されていたが、昭和52(1977)年より文部省委嘱の公開講座となり、以後、「くらしと健康」の演題で毎年欠かさず7月から12月にかけてそれぞれ6回シリーズで本学部大講義室で開設。平成10年度開設のそれは文部省委嘱のものとしては第22回。市民対象で「健康」に関する啓発を目指す。」³⁾

本稿は、大学公開講座「くらしと健康」の成立・発展過程をたどる一方、この講座を支えてきた学習仲間の熱き思いを中心に、生涯学習のささやかな総括を試みるものである。

1) 愛媛大学教育学部
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho, 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577,
Japan

第一章 公開講座「くらしと健康」 の成立・発展過程

1. 自主講座としての出発

1974年、愛媛大学教育学部に赴任した山本が手がけたのは、現場の教師、養護教諭との学びあいの会であった。「野火の会」と称するその会は、看護学校の教師、大学生なども参加しながら歩み始めた。参加者の一人はこの会の魅力について、次のように述べている。

「今まで研修会、学習会、講習会その他、機会がある毎にいろいろな会合に出席していましたが、どの会も受け身で時間内の話を聞いて帰るといった定型のものばかりで、その時は力を入れて、なるほど、ああそうかと思いつつもメモをとって帰ります。熱のさめない間は、いや時間の経たない間は覚えている、だんだんとその会のあったことさえも忘れ、あとでメモを開いても？か解からない状態です。しかし、この会のインスピレーションは「自分で苦勞して勉強してくる会」だなーと思い、始め

2ヶ月に一度なんて、間のびした会だなーと思ったことが、自分ながら恥ずかしくて…。いえ、2ヶ月に一度の会合でも仕事をもっている私には、長くない学習時間です。

いつもなら会場で意見を求められても周囲に気がねをしたりして、思っていることも十分言えないのに、この会では全くそうしたことがなく、のびのびと意見交換をし話せる場があるようでした。

時間内に結論を出して決定しなければならないとか、主催者に気を配りながら意見を言うとか、このようなことの全く抜かれた会、自分の思っていること、考えていることを話して、それぞれの立場の方々から御意見をいただくなんて、ちょっと他にはない会合だと思います。それに何より、自分で学習してくること、このことが自分を成長させていく、自分に力をつける大切な点だと思いました。これがこの会のすばらしさです!!」⁴⁾

もっと多くの人に学ぶよろこびを味わってほしい。そんな願いが次の新たな一歩につながったのである。

表1 例会のあゆみ

例会	日	時	ところ	テ	マ	報告者	参加者数
1	1976.	3.	7	愛媛大学	青年と性	山本	7名
2		5.	9	〃	保健の授業—疾病とその予防—	船田・池永	9
3		7.	18	吉海町	養護教諭として薬をどう扱うか	成行・池本	11
4		9.	5	愛媛大学	養護学校における教職員の健康問題	玉井	18
5		11.	7	〃	島の子の健康問題	忽那	18
6	1977.	1.	9	〃	身長伸びと視力の低下状態	宮崎	16
7		3.	13	〃	—高校における災害発生の実態—	久米	21
8		5.	15	〃	大学生の生活実態と意識	渡部	19
9		7.	17	久万町	学習指導要領案をめぐって	山本	11
10		9.	11	愛媛大学	障害幼児の食指導	村上・二宮	16
11		11.	13	〃	点数はオールマイティか?	船田	12
12	1978.	1.	22	〃	私の保健の授業—事故災害—	池永	14
				〃	目の保健指導	忽那	
13		3.	12	〃	一人の親として発言する	松室	13
14		5.	21	〃	大学における性の教育	山本	14
15		7.	16	中島町	自閉傾向幼児に対する排泄指導の記録	長尾	14
16		9.	10	松精看護学校	看護教育における臨床実習について	藤森	18
17		11.	12	愛媛大学	高校生食生活—アンケート調査にとりくんで—	内広・管	12
18	1979.	1.	21	〃	救急処置簿からみた上高生	奥村	19
19		3.	11	〃	私の卒業研究—保健指導・保健組織活動・学校給食—	青野・伊賀・加藤	31
20		5.	13	〃	回想—学校保健50年—	唐津秀雄	30

2. 公開講座「くらしと健康」の発展過程

自主講座として出発した学習会は、やがて生涯学習推進の動向のなかで、愛媛大学公開講座の一つとして

開講されるようになった。その名称もはじめは「健康の科学」、次に「生活と健康」(1981～1983)、そして「くらしと健康」(1984～現在)と変わってきたが、そのテーマは実施要領にあるように一貫して憲法をく

らしに生かすことにこだわってきた。

「人の健康は、人々の暮らし方が関係しあって良くもなるし、その逆にもなるものです。私たちは、人間らしい生活を営むために、心も体もそして生活の周辺的环境にも配慮し、自分の行動を創りながら、生活の全体を望ましいものにするための努力を積み重ねていかなければなりません。」

講師は、教育学部スタッフの向井康雄と山本万喜雄が担当し、二人の研究活動の持ち味を生かしながら内

容づくりをしてきた。ただ1999年だけは、「中日生活事情」という比較文化論を学ぶために、特別講師をお願いした。

この20年あまりに公開講座「くらしと健康」は、毎年7月から12月にかけて月1回のペースで、日曜日の午後に開講してきた。どのような手順で受講者を公募してきたかについて述べておこう。まず学部内で公開講座を開講するかどうかの文書が各教室に配られる。その希望者は教授会の議を経て、実施要領を作成。そ

1999年度愛媛大学公開講座実施要領

1999年6月
愛媛大学教育学部

1. 主 旨

本講座は生涯学習の充実が要望されている今日に対応するべく一般社会人を対象にして開設されたものであります。

2. 講座内容、講師、日程等

○ 講座のテーマと内容

「くらしと健康」

人の健康は、人々の暮らし方が関係しあって良くもなるし、その逆にもなるものです。私たちは、人間らしい生活を営むために、心も体もそして生活の周辺的环境にも配慮し、自分の行動を創りながら、生活の全体を望ましいものにするための努力を積み重ねていかなければなりません。

本講座では、健康・発達・教育及び環境のテーマに迫るとともに、とりわけ今年は、映画「プラス」を観てイギリス労働者の生きがいと文化を語りあい、そして特別講師による「中日生活事情」の比較文化論を学びあいたいと思います。

○ 講 師

愛媛大学教育学部教授 向 井 康 雄

教授 山 本 万喜雄

筑波大学心身障害系博士課程 王 一 令 (特別講師)

○ 受講定員 50名

○ 日 程

7月11日(日) 8月29日(日)

9月26日(日) 10月24日(日)

11月14日(日) 12月5日(日)

※いずれも13時00分～16時30分(6回20時間)

ただし、第1回と第6回は13時00分～16時00分まで

○ 受講料 7,500円

○ 対 象 一般社会人

○ 場 所 教育学部大講義室

3. 申し込み方法

下記の申込書に必要事項を記入のうえ、7月9日(金)までに受講料をそえて、愛媛大学教育学部学務係まで申し込んでください。申し込み受け付けは先着順とし、定員に達し次第締め切ります。

4. 修了証書

所定の課程を修めた者は、修了証書を授与します。

5. 本講座に関する照会先

〒790-8577 松山市文京町3番 愛媛大学教育学部学務係 (TEL 089-927-9377)

の募集のお知らせは事務スタッフの手を経て、報道機関（NHK、民放、新聞社）やミニコミ誌に届けてもらう。そして公開講座に来てもらった人たちには手紙で郵送する。次に、最新の公開講座実施要領を示そう。

こうした募集方法によって受講者が集まる。次に、受講者数の一覧を示そう。

表2 公開講座「くらしと健康」受講者数・修了者数

実施年	受講者	修了者
1979	40	
1980	71	40
1981	65	28
1982	37	21
1983	40	24
1984	48	35
1985	38	32
1986	48	35
1987	39	18
1988	50	32
1989	49	40
1990	57	44
1991	47	34
1992	41	34
1993	50	39
1994	36	27
1995	38	27
1996	44	33
1997	32	22
1998	27	18
1999	30	22

開講6回のうち、3分の2以上の出席者には、教育学部長名による修了証書を授与する。その交付者は近年、7割前後である。そして参加者にはお礼状を出す。次に1992年の例を示す。

*

例年、「くらしと健康」の学習が終わりますと、本格的な冬の訪れと世のあわただしさを感じます。私共がささやかに10年以上も続けて参りましたこの学習は、今日では国をあげて「生涯学習」として推進されています。

21世紀を温かく迎えるためには、残す7年間を大切に過ごさねばなりません。

それには、みなさんと一緒に“学ぶ”生活が続けられなければなりませんし、学ぶことに留まることなく、学んだことを“知る、考える、知らせる、そして話し合う”生活を大切にしなければなら

ないと考えます。

更にその結果を、生かすためそこを変えることも大切です。

明年も、皆さんと一緒に学ぶ楽しさを続けて参りたいと存じます。

終了の御挨拶に御礼を申し上げます。

1992.12.15

向井 康雄

山本万喜雄

こうした手紙による交流は、お互いの絆を深めるようである。

3 住民に奉仕する公開講座

公開講座「くらしと健康」とはどのようなものか。その全体的イメージを伝えるために、13年前に執筆し朝日新聞紙上に掲載されたものを再掲したい。⁵⁾

*

キャンパス内の木々が、新緑から黄色にそして深い茶色に変わるころ、大学祭の季節がやってきます。国民に開かれた大学づくりの一環として続けられてきた公開講座「くらしと健康」は、今年で10年目を迎えました。

例年、参加者の皆さんは、日曜日の午後にもかかわらず、県内各地からいそいそと出かけてきます。ちなみに今年（1987年）の受講者の住まいは、北宇和郡日吉村をはじめ、吉田町、明浜町、宇和町、長浜町、松前町、砥部町、中島町、重信町、川内町、松山市、今治市、そして西条市と記入されていました。

毎年のことながら、私たち（向井康雄、山本万喜雄）は、熱心なその姿に励まされます。時には、参加者からうれしい便りも届きます。

1987年の仕事始めの日、一通の封書。健康で文化的な人間らしい生活を営むために、いのちとくらしと生き方をきり結んだ内容を受講されたお母さんの一人は、心をこめて5枚の便せんに、その喜びをつづっていました。手紙の一部を紹介しましょう。

「あんなに大変だと思っていた子育て、時には泣きたくなるような時も何度かありました。自分の子どもでありながら、子どもの心がかみきれないで、とうとう子どもの前で泣いてしまった欠点だらけの母親でした。変ですね、今は子育てが楽しくて仕方ありません。親として子どもに教えてゆくことよりも、親として子どもに教わることの方が、はるかにたくさんあることを知りました。親の視点の置き方によって、子どもが良い子にも悪い子にも見えてくる怖さも知りました。子どもの欠点がとても貴

重な個性に思えてまいりました。この2つの宝をやがて、いつかは他人の手に渡す日が来るまで、大切に守ってゆく責任の重さを感じずにはられません。」

この子ども観の変化のキーワードは何か。それは深い信頼に支えられた謙虚な学びの日々でした。学ぶことが人間としてよりよく生きることと不可分であるとすれば、それは一生涯にわたる仕事であり、権利であるといえましょう。

さて、今年の講座では、映画「走れリユウ」を観て、家族・労働・愛について考えたり、人生のベテランから学んだりしています。その日のテーマが老人問題であっても、介護の原則が子育てにも読みかえがきくから不思議です。

たとえば、神経精神科医である長谷川和夫先生によれば、痴呆性老人の介護の原則について、次のように指摘されます。

- ①老人のペースに合わせてことを運ぶようにする。
- ②必要な場合には、同じことを根気よく繰り返して言う労をおしまない。
- ③何かを老人に伝えたい時には、一度に2つ以上のことは無理と考えて、なるべく単純な形にして1つずつ伝えていくこと。
- ④話しことばだけでなく、白い紙に伝える内容を書いてみるのもよい。
- ⑤なじみの環境で、なじみの人が介護すること。
- ⑥感情の交流を大切にすること。安定したおだやかな気持ちで接するようにすること。
- ⑦介護する人が、心身ともに健康であること。

(映画「痴呆性老人の世界」パンフレットから)

いかがでしょうか。記憶と知能が障害を受けていても、感情は保持されていることが多いといわれる痴呆性老人。美しい映像を通して問題の特異性と緊迫性とをみごとに伝えることに成功した映画「痴呆性老人の世界」の監督、羽田澄子さんも別のところでこう述べています。

「私は、けっきょく、この老人たちとつきあっていて、一見、とてもきたないし、なにもできないし、つき合いにくいし、この人たちを大事にしろといわれてもむずかしい。でもよく見ていると、することなすことがおかしいけれど、この人なりに一所懸命やっているところが見えてくる。そうすると、それを助けてあげたいという気持ちもわいてくる。」

「この人たちを見ていて感じたことは、人間というのは、それは人間にかぎらず命のあるものすべてに言えると思うのですけれど、この世に生を受ける、生命を授かるということは、その生命が終わるまで生きるということですね。そうすると、生きて

いるということは、命のあるものにとっては最大の価値だろうと思うのですね」

「人間は、他の人間を助けることができるのですから、そうすることが人間の社会なのだというふうに思います」

(田中孝彦「友情・恋愛・人間愛」大月書店刊)

昨年、東京でこの記録映画を観て、羽田監督の講演を聴いた私には、これらの言葉が映像とともに鮮明によみがえります。

ところで、多くの人々に支えられているこの公開講座も、近年、受益者負担の傾向が強められています。その上、臨教審は大学に対する国家統制の強化を明らかにし、具現化をはかっています。「審議経過の概要(その4)」には露骨に方針を明示しました。

「国立大学はその財政の基本的部分を国費によってまかなわれ、国が必要とする教育ならびに学術研究を直接に担うものであるから、国の教育政策および学術政策上の要請に応じ、国および社会への貢献に努めることは当然である」と。

財界に奉仕する人づくりを核とした国家の教育権か、それとも住民に奉仕する人づくりを核とする国民の教育権か。激流の中、10月31日には真の大学づくりを求めて、教育研究集会在学内で開催されます。

*

生涯学習が強調される一方で、文部省はいかに受益者負担の傾向を強めてきたか。次に公開講座受講料の経年変化のデータを示そう。

表3 公開講座受講料の経年変化

1979年	1,000円	(20時間当たり)
1980	1,750	(24時間当たり)
1981	1,750	〃
1982	2,500	〃
1983	2,500	〃
1984	3,500	〃
1985	3,500	〃
1986	3,500	〃
1987	3,600	(以下20時間当たり)
1988	3,600	
1989	4,900	
1990	4,900	
1991	4,900	
1992	5,560	
1993	6,100	
1994	6,100	
1995	6,700	

1996	6,700	(20時間当たり)
1997	7,400	〃
1998	7,400	〃
1999	7,500	〃

1987年より開講時間を変更したのは、受講料の額が1講座当たり15時間までにつき3,000円(15時間を越える場合は、5時間増すごとに600円を加算した額)という通知があったためである。

国立大学の授業料が年々増加しているように、公開講座の授業料もこの20年間で7.5倍になり、受益者負担の傾向は一層強められているのである。

4 公開講座における映画の上映

憲法25条にあるように、健康で文化的な生活を営むことは、国民の基本的な権利の一つである。人間らしく、人間として生きるためには、良い文化を享受する権利の行使が不可欠であろう。私たちの公開講座では、配分された経費(校費)の大半を映画上映にあててきた。

どんな映画を観てきたか、次にそれを示そう。作品を選ぶ山本の映画観が試されるようである。

表4 公開講座で上映した映画

1983	「さくらんぼ坊や①」(山崎定人監督) 「18か月健診」
1984	「さくらんぼ坊や④」(山崎定人監督) 「ふるさと」(神山征二郎監督) 「海と太陽と子どもたち」(中山節夫監督)
1985	「高原に列車が走った」(佐伯孚治監督)
1986	「子どもたちへ いのちと愛のメッセージ」 (楨坪多鶴子監督)
1987	「走れリュウ」(小松崎和男監督)
1988	「風のあるべじお」(中山節夫監督)
1989	「ふるさと」(神山征二郎監督)
1990	「夏のページ」(及川善弘監督)
1991	「柳川堀割物語」(高畑勲監督)
1992	「アトビー」(高橋一郎監督) 「アリサ」(山崎定人監督)
1993	「風の子どものように」(瀬藤祝監督)
1994	「さくら」(神山征二郎監督)
1995	「ライヤンツリー」(有原誠治監督)
1996	「とべないほたるPiPi」(中田新一監督)
1997	「原野の子ら」(中山節夫監督)
1998	「秋桜」(すずきじゅんいち監督)
1999	「プラス!」(マーク・ハーマン監督)

こうした映画上映を通して、くらしの中で上質の文化を食べることの大事さを語りつけてきたのである。

第二章 私たちにとっての公開講座

1. 1999年の実り

1999年の公開講座「くらしと健康」は次のようなテーマで開講した。

No	日時	テ ー マ
1	7.11	開講式 現代の生活と青年の自立
2	8.29	子どもたちの生活・親たちの暮らし
3	9.20	映画「プラス!」を観て —労働者の生活と文化
4	10.24	中日生活文化論—お札の考察
5	11.14	暮らしと食文化、ストレス
6	12.15	生きがい・文化・健康 修了式

毎回、学習資料を配布しての講義、そして後半は参加者による討議、感想の交流を行ってきた。ここでは、まず第一回目に使った学習資料(拙文)の一つを紹介しよう。

〈学習資料〉 2つのカエルの話

これはあなたの手帖です
いろいろなことが ここには書きつけてある
この中の どれか 一つ二つは
すぐ今日 あなたの暮らしに役立つ
せめて どれか もう一つ二つは
すぐには役に立たないように見えても
やがて 心の底ふかく沈んで
いつか あなたの暮らし方を変えてしまう
そんなふうな
これはあなたの手帖です

花森安治

これは、「暮らしの手帖」に刻まれている名編集長・花森安治のことばです。先日、発行されたばかりの『別冊 健康をつくる1999年版』〈青春へのメッセージ〉を読んでいたなら、「思春期の子どもはおたまじゃくしに似ている」という表現を見つけました。評論家・斎藤次郎さんのこの指摘は、思春期の変化の激しさをおたまじゃくしにたとえたものではありません。彼は、プラスチックの水槽で飼っていたおたまじゃくしがカエルになる直前に溺死した「事件」を通して、次のようなことを考えたのです。

なぜ、水中で暮らしていたおたまじゃくしが溺死したのか。その原因は、水槽に、おたまじゃくしははい上がる岩がなかったから。おたまじゃくしはエラで呼吸。大人のカエルは肺呼吸。ですから、おとなになろうとする一瞬、おたまじゃくしは陸にあがって空気中の酸素を呼吸し、呼吸器官をチェンジしなければならないのです。自然の世界では簡単なことが、人工的なプラスチックの水槽では、はい上がることができなかったという次第。

斎藤さんは、他の人々ならば何気なしにみすごしてしまうような小さな事例のなかから、大きな意味をつかみとりました。すなわち、彼は死んだおたまじゃくしに、子どもが大人になることの難しさをみたのです。人間も、支えになる「岩」がなければ大人になれないのではないか、と。さらに斎藤理論によれば、この際、親や教師はこの「岩」になれず、支えになれるのは、同じ成長過程にある「友だち」ではないかというのです。

納得できるこの話と、本書に掲載されている氏のエッセイ、「『自立』するきみへ」を読めば、あなたもきっと何かを感じることでしょう。

ところで、この記事を読みながら、私はもう一つのカエルの話を思い出していました。それは、ぬるま湯のカエルのこと。ピーカーの中にカエルを入れて熱するとどうなるか。しのびよる徐々の変化に鈍感であれば、人間も生命が守れません。平和と戦争の綱引き。「戦争法案」をはじめ憲法9条をなし崩しにしようとする勢力の企てを見抜かなければ、子どもの未来はありません。今こそ、平和への意志を結集したいものだと思います。(1999. 5. 5)

この日、参加者からかなり反響があった。感想文のいくつかを紹介しよう。

① 久しぶりの大学、大講義室。自分が大学時代の時は何とはなしにダラダラと来ていたのに、今日はいれしくて、なつかしくて…。自分で勉強しようと思うことにこんなに心踊るものかと、今さらながらに実感しました。

就職してこの4年間、本当に無我夢中で、仕事をやめ実家に帰ったことで心のゆとりや家族とのかかわりの中でのささやかな幸せを感じ、この講座にも出会って充実感を感じています。

今日の講義“自立”は、私にとっては頭が痛い。親から「よー勉強しとき…」と言われそうですが、8年一人暮らしをして家に帰ると以前よりは成長したようで母から認められることもあってうれしく思います。「自分をコントロールしていくのは優し

さ」この言葉が心に残りました。日々、頑張りたいです。

② 今回のテーマは我が家にぴったりだったので、ああ参加して良かったなあと思いました。こういう会にはじめて申込みする時に人のお話を聞くのは好きなのですが、しゃべるのが苦手なので不安はありました。これから自分自身成長していきたいと思っているので、自分のからに閉じこもらず、色々な人の経験、考え方をいい方向に吸収し勉強したいと思っています。とても楽しみにしているので、休まないよう努力したいです。

③ 私自身のライフワークのテーマともいうべき「自立」という事で、初回のテーマとしてはとてもうれしかったです。今年も、ラボの子供達、高校留学も含めて35名余りが四国から旅立ちます。私の仕事は彼らの事前活動(自立の為の準備)の担当であった訳ですが、万全の準備ができたとはいえ、日本人に会う事のない、甘えの許されない、そして他人の飯を食い、人々のお世話になって生きる彼らの一ヶ月、一年…この日々を悶々と「どうか無事に生きて帰ってきますように」と祈り続ける日々が始まります。毎年続くこの活動ですから私にとってエンドレス。でも子供にとっても、私自身にとっても「自立」するためには、勇気と決断そして不安はつきものです。そういう壁をいっぱい作りあげて、大きな自立を獲得した子供達が自信にあふれた顔で、自分の体験を語ってくれる輝きを見せてもらえるのがうれしくて、この仕事がやめられません。

今、我が子を見る時すら、まぶしいくらい素敵に自立してきた彼らが誇りです。親が子を誇りに、子が親を誇りに思えるいい関係、大切にしたいです。

with Love

7/24からスウェーデンに旅立ちます。あちらの人々の自立や教育システム、福祉、しっかり見てきたいと思っています。

④ 大学入学したとたん「自立をせまられる」今の学生の姿を多く見えています。自分の家庭の子供について考えてみても、きっとそうなるだろうなと思いつつも、受験勉強に追われ、ぎりぎりの生活をしている我子に、今となっては何ができるのか、考えてしまいます。

ただ、学生達の身近かにいる大人として、見守っている者がいるというアピールは大事ではないかと思っています。

*

この年は、いろいろな思い入れがあって受講者の皆さんに感想を求めた。10名の方からの返事があったの

で、次にそれを掲載したい。そこには、それぞれの思いがその人らしくまとめられていた。

2. 私にとっての公開講座

(1) 年に6日間のささやかな楽しみ

玉井 祥子

今年(1999年)の公開講座を終え、今年も参加できて良かったとまた色々と思ひ返しています。講座との出会いは、開始初期のころで20年前位になると思います。

養護教諭になったころで、短大で学んだ事に物足りなさや、仕事に対する不安があったころです。そんな時、先輩に誘われて参加した会で山本先生を知り、そして公開講座に参加しました。

学校での学習とはひと味もふた味も違い、自分の生活と仕事を見直すために大いに役立ちました。独身のころ、「さくらんぼ坊や」とであい、子育てとはと考える機会をもてたことで、自分がどんな親になりたいか(なれるか)、どんな大人であればいいのか、とっかかりがわかったような気がします。知っていることとできることはもちろん別だけど、知らないよりは知っていたと思う自分があります。

子育てでしばらく公開講座から離れてしまいましたが、ここ数年、修了証書をいただけるような参加ができるようになりました。一週間終わってやれやれの日曜日で大変と思えばそれまでですが、私にとっては別の意味で、エネルギーの充電ができました。参加すれば色々な方との出会いがあり、職場や家庭では経験できない、様々な立場や世代の方のお話を伺うことができました。

映画もまた楽しみでした。映画館では観ることのできない、地味だけど思いのいっばい詰まった、本当にいい映画と出会い、人間っていいなとか、生きることのしんどさや喜びを学びました。次はどんな作品と出会えるか毎年が楽しみです。

また、本との出会いもあります。読みやすいものばかり選ぶ傾向にありましたが、山本先生の「いま この一冊」を参考に書籍選びをしたり、講義のなかで触れられた本も読んでみたりしました。あまり読書の習慣がなかった私ですが、少し読書の世界が広がったようです。

向井先生からいただく、海外事情や不条理な社会問題の情報には、目から鱗でした。人は何を大切にして生きるかを考える機会になりました。

年に6日間のささやかな楽しみです。また来年もよろしく…

(2) 公開講座を受講して

行本とよ子

かつてないほどの速さで世の中の諸事情が変わりゆく昨今、私たちは何を基準にして生きていけばいいのか、迷うことが多いのが実情です。できるならば、健康で、快適に、生き甲斐をもって生きていきたいと思っています。しかし、日常の忙しさに紛れ、疑問をもったまま、あるいはもっと知りたいという欲求不満のまま流されていっていることが多いのです。あくせく働くだけでなく、自分の健康について、よりよく生きるということについて、また、世の中の話題についてももっと考え、知りたいという願いから、この講座を受講しはじめました。

今回の「くらしと健康」講座の受講は4回目ですが、修了証をいただいた年だけ数えれば3回目になります。

毎回思うのですが、この講座は我々の生活に密着したテーマが多く、普段から関心をもっていること、疑問に思っていることについていろいろな情報を与えてくれます。

今、一番関心のあることは、この世の中で子どもや青年がどのように生きていくのかということです。物質的には満たされていても、精神的には飢餓状態の青少年が多いのではないのでしょうか。様々な思いもかけない凶悪な犯罪を犯しているのは、大人よりも青少年の方が多くに思われます。マスコミで取り上げられるのは氷山の一角でしょうから、その予備軍は想像を越える数でしょう。どのような環境で何を食べ、人とかわかり、どういう思いを抱いて毎日生きているのかと心配になります。彼らがやがて日本の国を担っていくのです。青少年も大人もよりよく生きていくために、我々は何をすればいいのかということについていつも考えさせられます。

この講座では毎回違ったテーマを取り上げ、我々の身近にあって親しみ深いもの(たとえば「サザエさん」や「寅さん」等)を題材に、楽しく気楽に考えさせてくれるので、窮屈でなく、3時間もあっという間に過ぎてしまいます。また、映画やスライドは少しだけ知っていることについてより深く、広く教えてくれたり、感動を与えてくれたりします。

特異なところでは、王-令氏の「お札の考察」がありました。外国のお札についてあんなに詳しく説明していただくことは、個人的な生活のなかではまずあり得ません。

また、先生方がはるばる遠くまで足を運んで得られた情報やお読みになった書物の紹介も貴重なものでした。自分の狭い世界が少しは広がる思いです。

毎回最後にある一人一人の感想や考えを述べることも老若男女の様々な生活や考えに接することができ、勉強になりました。最終回の「持ち寄り会食」もそれぞれの人の得意分野を知ったり、個人的に話がし易く多くの情報が得られたりする場であるという点で大きな魅力です。

受講した内容が自分の生活の中で少しずつ蘇り、その場その場で私を助けてくれています。

ご多忙のなか、月1回の休みを返上してのご講義、本当にありがとうございました。

これからもますますお元気で、我々を啓蒙して下さいますようお願い申し上げます。

(3) 公開講座と私

阿部ヒロ子

娘を亡くし、どう生きればいいのか苦しみのどん底の時、この講座に出会えた。修了証書は6枚にもなった。常に自分の生き方を講座「くらしと健康」のなかに重ねていたように思う。

亡き娘が出会わせてくれたように思えるこの講座は、いつも亡き娘に向き合っているようだった。だからこそ、生きる意味を問い、いつもどう生きればいいのか考えさせられ、子供の問題を考えても、老後の問題を考えても、映画を観ても、どんなテーマを与えられても、全てがそこから考えてしまう。

いつも我が子の死と向き合う自分は苦しい。何をどう考えれば楽に生きていけるのだろうか、生きることはこんなに苦しいのか、苦しいからこそ何かを求めたいと思う日々の生活のなか、いつも何かを求めている自分に気がつく。月に一度の受講の度に、その宿題を探し求めに出かけているように思う。

誰も「こう生きなさい」とは言わないけれど何かヒントを掴みたくて、何かを知りたくて参加している。自分は「こうあるべきだ」とも思わないけど何かを感じたい。そして生きる喜びをほんの少しでもいい掴みたい。いつもいい資料を準備して下さる先生には本当に有難く思う。その資料の一行の中にも、「ウンウンコレ！」と今の自分の気持ちにピッタリくるものを探し求めている。そして共感できた時、生きる感動と喜びを知り、今生きている居場所を確認できるようにさえ思う。そんな思いでこの講座に参加させて戴き、他の講座にない何かを感じている。気がつけば6年余になっていた。

半年間受講し、後の半年は貴重な資料を整理し、ゆったりした気分でじっくりその時の思いを振り返りたい。

生きることに必死だったこの11年、忘れもしない初

めて参加した年の秋のこと、受講日が大学祭と重なり、多勢の華やいだ学生たちの中を講義室まで歩いた時、その中に亡き娘の面影を必死で探し、なぜ娘がいないの？と思うだけで涙があふれ、洗面所へかけ込んだ。なんと今秋は模擬店でおにぎりも買って頂くことができた。心の中の悲しみは少しも変わらないのに、生きていくって、こういう事なのかもしれない。

生きる喜びを掴んだつもりでも、それは一瞬の泡のようなものにも思える。一つのことを求めずっと追いつけても、どれだけのものを納得できるのだろうか。その虚しさと共に闘い、それでも生きる喜びを感じたい。それは出会いの中から感じるのだと思う。そんな思いで毎年参加せずにはいられなかった。そんな私に生きる喜びを教えて戴けたのはこの講座だった。

向井先生、山本先生には心から感謝したいと思う。

(4) 公開講座と私

高橋 朝子

地域社会の一員として暮らす者にとって、大学の機関で公平な普遍的立場の、公開講座が提供されることは、非常に有り難いことである。現代の情報過多の中で、日常生活を営む者は出来る限り正しい情報と、何か今あるいは今後、問題点なのかを知りたいと思っている。公開講座はまさしくそれを提供してくれる場である。だからこそ時間の都合がつけられる限り参加し続けたい。

毎年、健康と暮らしのテーマであることも救われる。健康は、人間が基本的な生活ができる最大限の課題でもある。現在の暮らしはあまりにも多様化し、本物のもつ良さを見逃しがちであるような気がする。マスコミの報道にも偏らないものであってほしい。大学の地域に開かれた唯一の公正な学ぶ場はありがたい。学ぶ中で新しい仲間との出会いや新鮮な話題を知る喜び、また個人では知りえない問題や、偶然遭遇した人の悲しみと痛みなどを共感共有できるなど、自分の世界だけでは経験できない貴重な場である。時間を作る努力もいるけれど、参加してはじめて知る感動に魅力を感じている。

(5) 公開講座の感想

青木 弥生

お忙しい中、日曜日をさいての公開講座で、先生方の負担は大変だと拝察致します。その代わりに、私たちはいい刺激を受け、考えなければ…と、乏しい細胞をやりくりすることができるのです。

感想を短くまとめると、①視点の定まった情報が得られる、②種々雑多な情報を取捨選択する眼が養われ

る。③自分の考えを確立するための標識がある安心感、④受け入れてもらえる心地良さ、⑤なによりもお二人の先生の学者らしい清潔感にひかれました。

(6) 私の自立のきっかけ

長野 瑞恵

子供が自立したこの時期に公開講座を受けることができ、とても充実した年になりました。考え方も随分変わり、今まで思い込みであきらめていた事でも、きちんと話せばわかってもらえる事もありました。いただいた資料を読み返すたびに新しい発見があり、理解できた時に感動がありました。

今まで書くことの大嫌いだっただが資料を読んだ後、書きたくなるのです。書かずに放っておくと、せっかくの発見や感動が消えてしまいそうで…。先生からいただいた心に残る大切なものを忘れてしまわないように下手でも書くようになりました。

第6回の「生きがいとボランティア・文化活動」についての資料も、とても勉強になりました。

「老年期は自立できなくなったら依存する気持ちも重要です。お互いの人と人との間で依存する。それができるような社会を構築するのが私たちの責任でしょう。」

その通りだと思います。私が一緒に絵を描いているグループには70才以上の人が多く、どこかに出品する時など運べない人は、先生が車で運んでくださるというのに、「迷惑だから出さない」という人がいます。先生は、「人に迷惑をかけないで生きていけるか、みんな迷惑をかけ合いながらやっているのだ。私もいつまで運べるかわからんが、運べなくなったらNさんにも頼むんよ。」とおっしゃいました。そう言われた事はとてもうれしい事でした。

私はスイミングがあって、みんなと一緒に描けなくて、絵をもって行ってみんなにいろいろ批評してもらうのがとても励みになっています。だから役に立てることはうれしいのですが、そんな私の気持ちを何も言わなくてもわかってもらえているのは本当にうれしい事です。このごろ優しくなった自分が気に入っています。きっとみんなに優しい先生の影響だと思います。

この公開講座は、私の自立のきっかけになりました。いつも行きたいと思っているうちに終わっていた美術展にも行くようになりました。映画の楽しみもできました。仕事で忙しい主人とたまに話すと共感する事が多くとてもうれしいです。最後の会で山田さんといろいろお話できてうれしかったです。素敵な人生の先輩で、いいお友達になってもらえそうです。

これからの半年は、今までいただいた資料を読み返ししっかり復習しておきます。来年の公開講座、楽しみにしています。

(7) 公開講座を受講して

山田 稔恵

愛媛大学の公開講座「くらしと健康」を私に初めて受講するきっかけを作ってくれたのは、40年来の心友からの誘いでした。一度だけのつもりが講座のおもしろさに魅せられて、今年で8回の受講となりました。

(1回でテーマが6、だから八回で48のテーマを受けたことになり、この間一度だけ欠席しましたが、よく受けたものだと自分を少し替えてやりたい気もします。)

向井、山本両先生の国内、国外の内容豊富な講義にいつも笑いあり、又感動ありで毎回それは楽しく受講することが出来ました。20年も続いているということは、先生方の講義に多くの受講生が共感したのだと思います。私は大変多くの勉強をさせていただきましたし、人とのつながりもいただきました。本当に嬉しく思っております。

今回で私は家庭の事情により卒業ということになりますが、これからもこの講座が続くことを願っておりますし、もっともっと多くの受講生が増えていくことを祈っております。長い間本当に有難うございました。

(8) 公開講座に参加して

鎌田 正康

私の持論は、「できるだけ悔を少なくする。いいと思ったことも悪いと思ったことも、やれる時にやる。悪ければすぐやめる。人の欠点よりもいいところを見つける。どうせやるなら、いやいややらずに悔の残らないようにやる。」今迄やってきました。

本講座の受講を通して、私の一番欠けていたものを早く見直すことができました。

失敗を恐れない勇気

ゆとりのある健康な心を持ち、多勢の仲間とともに生涯学習を続ける楽しさを改めて教わりました。向井先生、山本先生、有難うございました。

(9) 香川の地から夫婦で受講して

鎌田多恵子

香川の地から夫婦で公開講座を受講させていただき早3年。いや、まだ3年。

初めて山本まきお教授の講演を聞く機会に恵まれたのが、今から4年前の事でした。夫婦で何度か香川で講演を聞いた時、私たちは何か太い糸で引っぱられる

かのように…。今思えば、山本まきお教授からいただいた

「そんなに頑張らなくていいのよ」「子育てしながら親育ちをしましょう」「一生子育て 一生親育ち」などの言葉が、私たちを大きく支え、今では家庭・職場へと広く展開しています。

教授のお話は、いつもわかりやすく、とても心に残ります。すべて、前向きに考えられるようになって、感謝の気持ちでいっぱいです。これからも夫婦で一人前の私たちですが、よろしくご指導下さい。

(10) 講座の感想

丸山 光子

今回は本当に少ししか参加できずに残念でした。講座の感想が書ける程出席していない私ですが、1つだけお願いできるとすれば、後半マイクがまわる順序。座席順でなくていいのではないかと。誰からでも、話したい人からの方が、言葉が流れ出るような気がします。講座で一緒にさせて戴いた方々とも、もう少しいろいろ話せばよかったと思っています。

おわりに

継続は力なり、といわれるが、20年にわたってつづけられてきた大学公開講座。そこにはともに学びあい、育ちあってきた姿が確認できるであろう。手紙といえば、数年前、そっと届けられた山本への私信には限りない励ましを受けた。ここで人生の達人の手紙を引用したい。

「例年のこと乍ら、慌ただしく年を送り又、慌ただしく3ヶ日を終え、今はホッとしているところでございます。遅くなりましたが、昨年は色々有難うございました。又、御丁寧いな書簡にはただただ感銘するのみです。

今までよりほんの少し豊かで、ほんの少し実りのある生活を求めてまいりました。公開講座、ほんとうに身体全体で受けとめました。しかし言葉にも文章にもうまく表現できないもどかしさ、自分の考えていることを今話としてではなく発表することのむずかしさ、後々までも思い出しては赤面することしきり。今度機会があればこう少しはうまく表現出来るかも――。

御紹介下さった「自分を好きになる本」さっそく買い求め 自分の言動を反省し乍ら先ず自分を好きになろうと努力いたしております。

それにしましても、もっと早く公開講座に出会えていたなら――と後悔ひとしおです。毎回の演題は

言うに及ばず 話術の巧みさ、その歯切れの良さ、音程の豊かさが大勢の人達を魅了しているのだとつい失礼乍ら山本先生を分解してしまいました。

(中略)

一月の予定を作っておりました公開講座のないのをちょっと淋しい気持ちでみおくりました。足腰の達者なかがり受講したいと思っております。冬はこれからが本番、どうか御身御大切に かしこ

このところ独立行政法人化の動向をはじめとする、激動のなかの国立大学。とりわけ、教育学部は冬の時代を迎えている。そのなかにあつて私たちは、住民の学習権を保障するために公開講座を開設してきた。このささやかな歩みの体験が教育学部の今後を考える一つの視点になれば幸いである。次の拙文は読みかえれば、生涯学習にも通じるであろう。

「未来の教師」をめざす夢追い人のあなたへ

山本万喜雄

「カメラ店でよく見かけるD.P.E. これは現像・焼付け・引き伸ばしの頭文字です。写真の世界で『現像』と訳されているDevelopmentという言葉。経済学では『開発』、教育学では『発達』というから面白い。何か共通することはあるかを考えていたら、共通点は隠された潜在的なものを顕在化させるということになりそうです。

私たちの教育学部では、あなたの潜在的能力を顕在化し、そのユニークな持ち味が花開くことを願って、いくつかのコースを設けています。「夢を見る勇気のないものには、たたかう力はない」(澤地久枝)と言われますが、夢追い人のみなさん、あなたのチャレンジをお待ちしています。⁶⁾

末尾になったが、長年この未熟者を見守り、公開講座「くらしと健康」をともに支えて下さった向井康雄先生、及び公開講座担当の学務係の方々に謝意を表したい。

注

- 1) 愛媛大学50年史編集専門委員会編『愛媛大学五十年史』 p270. 1999年
- 2) 小野元之、香川正弘編著『広がる学び 開かれる大学』 p20 ミネルヴァ書房 1998年
- 3) 前掲書1) p270
- 4) 梶川絹子「野火の会の魅力」野火の会『野火』第2号 p38-39 1979年
- 5) 山本万喜雄「朝日新聞」1987.10.28付 拙著『え

